新潮日本古典集成

今昔物語集

本朝世俗部

三

阪倉篤義 本田義憲 川端善明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第四三回）
今昔物語集
本朝世俗部三

昭和五十六年四月五日　印刷
昭和五十六年四月十日　発行

校注者　阪倉篤義　本田義憲　川端善明
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一七〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Atsuyoshi Sakakura, Giken Honda, Yoshiaki Kawabata, Printed in Japan, 1981.

目次

凡例……九
巻第二十七　本朝付霊鬼……一七
巻第二十八　本朝付世俗……一四五
付録
説話的世界のひろがり……二九五
地図……三三三

巻第二十七　本朝付霊鬼

三条東洞院の鬼殿の霊の語、第一 …… 一九
川原院の融左大臣の霊を宇陀院見給ふ語、第二 …… 二〇
桃薗の柱の穴より児の手を指し出だして人を招く語、第三 …… 二三
冷泉院の東洞院の僧都殿の霊の語、第四 …… 二三
冷泉院の水の精、人の形と成りて捕へらるる語、第五 …… 二五
東三条の銅の精、人の形と成りて堀り出ださるる語、第六 …… 二八
在原業平中将の女、鬼に噉はるる語、第七 …… 二九
内裏の松原にして、鬼、人の形と成りて女を噉ふ語、第八 …… 三一
官の朝庁に参る弁、鬼の為に噉はるる語、第九 …… 三三
仁寿殿の台代の御燈油取りに物来たる語、第十 …… 三四
或る所の膳部、善雄の伴大納言の霊を見る語、第十一 …… 三六
朱雀院にして餌袋の菓子を取らるる語、第十二 …… 三八
近江国安義橋なる鬼、人を噉ふ語、第十三 …… 四〇
東国より上る人、鬼に値ふ語、第十四 …… 四七
産女、南山科に行き、鬼に値ひて逃ぐる語、第十五 …… 四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正親大夫□、若き時鬼に値ふ語、第十六……五四
東人、川原院に宿りて妻を取り吸はるる語、第十七……五七
鬼、板と現じ、人の家に来たりて人を殺す語、第十八……六〇
鬼、油瓶の形と現じて人を殺す語、第十九……六三
近江国の生霊、京に来たりて人を殺す語、第二十……六四
美濃国の紀遠助、女の霊に値ひて、遂に死ぬる語、第二十一……六八
猟師の母、鬼と成りて子を噉はむと擬る語、第二十二……七三
播磨国の鬼、人の家に来たりて射らるる語、第二十三……七五
人の妻、死にて後、本の形と成りて旧夫に会ふ語、第二十四……七七
女、死せる夫の来たるを見る語、第二十五……八二
河内禅師の牛、霊の為に借らるる語、第二十六……八四
白井君、銀の提を井に入れて取らるる語、第二十七……八七
京極殿にして古歌を詠むる音有る語、第二十八……八九
雅通中将の家に同じ形の乳母二人在る語、第二十九……九一
幼き児を護らむが為に枕上に蒔く米に血付く語、第三十……九三
三善清行宰相の家渡の語、第三十一……九四
民部大夫頼清の家の女子の語、第三十二……九九
西の京の人、応天門の上に光る物を見る語、第三十三……一〇二
姓名を呼ばれて野猪を射顕はす語、第三十四……一〇五

光有りて死人の傍に来たれる野猪の殺さるる語、第三十五 …… 一〇八
播磨国印南野にして野猪を殺す語、第三十六 …… 一一〇
狐、大なる榲の木に変じて射殺さるる語、第三十七 …… 一一四
狐、女の形に変じて播磨安高に値ふ語、第三十八 …… 一一七
狐、人の妻の形に変じて家に来たる語、第三十九 …… 一二〇
狐、人に託きて、取られし玉を乞ひ返して恩を報ずる語、第四十 …… 一二三
高陽川の狐、女と変じて馬の尻に乗る語、第四十一 …… 一二六
左京属邦利延、迷はし神に値ふ語、第四十二 …… 一三三
頼光の郎等、平季武、産女に値ふ語、第四十三 …… 一三四
鈴鹿山を通る三人、知らざる堂に入りて宿る語、第四十四 …… 一三八
近衛舎人、常陸国の山中にして歌を詠ひて死ぬる語、第四十五 …… 一四二

巻第二十八　本朝付世俗

近衛舎人共の稲荷詣に、重方、女に値ふ語、第一 …… 一四七
頼光の郎等共、紫野に物見たる語、第二 …… 一五一
円融院の御子の日に、曾禰吉忠参る語、第三 …… 一五五
尾張守□の五節所の語、第四 …… 一五九
越前守為盛、六衛府官人に付く語、第五 …… 一六八

歌読元輔、賀茂祭に一条大路を渡る語、第六……一七五
近江国矢馳の郡司の堂供養の田楽の語、第七……一七八
木寺の基増、物咎に依りて異名の付く語、第八……一八四
禅林寺の上座の助泥、破子を欠く語、第九……一八六
近衛舎人秦武員、物を鳴らす語、第十……一八八
祇園の別当戒秀、誦経に行はるる語、第十一……一九〇
或る殿上人の家に、忍びて名僧の通ふ語、第十二……一九二
銀の鍛冶延正、花山院の勘当を蒙る語、第十三……一九四
御導師仁浄、半物に云ひ合ひて返さるる語、第十四……一九六
豊後の講師、謀りて鎮西より上る語、第十五……一九七
阿蘇史、盗人に値ひて謀りて遁るる語、第十六……二〇〇
左大臣の御読経所の僧、茸に酔ひて死ぬる語、第十七……二〇三
金峯山の別当、毒茸を食ひて酔はざる語、第十八……二〇六
比叡山の横川の僧、茸に酔ひて誦経する語、第十九……二〇九
池尾の禅珍内供の鼻の語、第二十……二一〇
左京大夫□、異名の付く語、第二十一……二一四
忠輔中納言、異名の付く語、第二十二……二一八
三条中納言、水飯を食ふ語、第二十三……二一九
穀断の聖人、米を持ちて咲はるる語、第二十四……二二三

弾正弼源顕定、閑を出だして咲はるる語、第二十五 …… 二二四
安房守文室清忠、冠を落して咲はるる語、第二十六 …… 二二五
伊豆守小野五友の目代の語、第二十七 …… 二二六
尼共、山に入り茸を食ひて舞ふ語、第二十八 …… 二三〇
中納言紀長谷雄の家に狗を顕はす語、第二十九 …… 二三三
左京属紀茂経、鯛の荒巻を大夫に進る語、第三十 …… 二三五
大蔵大夫藤原清廉、猫を怖るる語、第三十一 …… 二四一
山城介三善春家、蛇を恐づる語、第三十二 …… 二四八
大蔵大夫紀助延の郎等、唇を亀に咋はるる語、第三十三 …… 二五一
筑前守藤原章家の侍、錯する語、第三十四 …… 二五四
右近の馬場の殿上人の種合の語、第三十五 …… 二五六
比叡山の無動寺の義清阿闍梨の嗚呼絵の語、第三十六 …… 二六一
東の人、花山院の御門を通る語、第三十七 …… 二六五
信濃守藤原陳忠、御坂より落ち入る語、第三十八 …… 二六八
寸白、信濃守に任じて解け失する語、第三十九 …… 二七二
外術を以て瓜を盗み食はるる語、第四十 …… 二七六
近衛御門に人を倒す蝦蟆の語、第四十一 …… 二七九
兵立つ者、我が影を見て怖を成す語、第四十二 …… 二八三
傅大納言の烏帽子を得たる侍の語、第四十三 …… 二八六

近江国の篠原の墓穴に入る男の語、第四十四……二八七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡例

〔本　文〕

一、本文は丹鶴叢書本を底本とするが、底本を、その表記法まで忠実に再現することは避け、つとめて読みやすい形をとるようにした。丹鶴本の誤りや疑問点は他本によって校訂して、本文を整えたが、そのことは頭注に必ず記されている。

一、底本は、漢字・片仮名交りで、片仮名を二行に小書きする、いわゆる宣命体で書かれているが、本書には次のように統一した。

A 底本の片仮名はすべて平仮名に改め、仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した（振り仮名も、原則として同じ）。仮名は小書きせず、漢字と同ポイント活字にした。

B 本文は意味をとって適宜に改行し、また段落を設け、会話文および、必要によっては心中思惟の部分に「　」を付け、句読点を施した。清濁も、校注者の解釈によって書きわけた。

C 底本の欠字は□によって示したが、該当すべき語の推定できるものについては、傍注、もしくは頭注にそれを記した。

D 漢字の字体については次の方針に従った。

a　異体字は、その異体字体に何らかの意味がある場合以外、原則として通用字体に統一する。

（例）　猶→狗　弊→弊

b　分字あるいは合字は底本のままとし、頭注に解説する。

（例）　草馬（「驊」の分字）　突部（「穴太部」の合字）

c　用字の全巻にわたる統一は行わず、底本のその個所の用字を尊重する。

（例）　牸↔牸牛

E　底本の漢字はなるべく保存するようにしたが、次のような場合は平仮名に改めた。

a　返読の助動詞やそれに相当する表記。

（例）　被用（テ）→用ゐられて　不狂（ソ）→狂ひそ

b　接続助詞やそれに準ずるものの表記。

（例）　雖有（モ）→有りといへども　乍（ラ）→ながら

F　漢字を返読する場合の語序は、原則として改めた。

（例）　无限（シ）→限無し　難有（シ）→有り難し

G　送り仮名については次の方針に従った。

a　活用語の場合、誤読を避けるために活用語尾はなるべく示すようにする。

（例）　有（ケリ）→有りけり

b　複合語も右に準じる。ただし、接頭語や、二字以上による熟合的な語については、仮名を介入させず、そのために読みにくくなる場合は、振り仮名を付す。

（例）　立走→立ち走りて　打言→打言ふ　御座→御座す

c　副詞類については、語幹の最後の音節を一律に平仮名で補記する。

（例）　慥→慥かに　自然→自然ら　強→強ちに

d　名詞に対する送り仮名は、底本にはあっても、原則として付けない。それを省いたことによって誤解の恐れが生じる時は、改めて振り仮名を付す。

（例）　験有→験有り

H　振り仮名については次の方針に従った。

a　宛字には必ず付す。

（例）　衣曝　艶ず　可咲しき　微妙く

宛字が表音的である場合（たとえば「浅猿」）は、まず振り仮名を付けることを優先し（この場合は、必ずしも歴史的仮名づかいに従わない）、その上でさらに送り仮名をも考慮する。したがって、次の例のように送り仮名に不統一が生じる場合も、まま存する。

（例）　浅猿さ↔奇異しく

b　補助動詞・副詞などの文法的な意味を担うもの、あるいは読み方の違いが語義の違いを導きそうなものには、原則として付ける。

（例）　強ちに　下様に　思えて

c　その他、読みにくいものには、見開き二頁の範囲内で少なくとも初出のものには付ける。

（例）　繚ひて　但して　販婦

d　固有名詞（人名・地名など）の一般的でないものについては、一話の初出の際には少なくとも付ける。人名における姓と名をつなぐ助詞「ノ」字は、送り仮名とせず、振り仮名の中に入れる。

（例）　茨田ノ重方→茨田重方（まつたのしげかた）

〔注　釈〕

一、注釈は、傍注（色刷り）と頭注とよりなるが、原則として、傍注には現代語訳、頭注には、事柄や言語に対する解説を宛てるようにした。しかし、スペースの関係で、現代語訳を頭注欄にまわさざるを得ない場合も生じた。

一、傍注の現代語訳は逐語訳ではなく、スペースの許すかぎりにおいて自然な現代語であるように努めた。

一、傍注における〔　〕は、本文にない語（主語・目的語・述語など）を補足するものであり、（　）は、会話文の話者を指示したり、欠字の個所に語句を想定補足したりするものである。

一、頭注は、説話の理解を深めるのに役立つように努めた。

一、頭注には次のような略記法を用いる。

A　たとえば「元明＝和銅元年」は、「元明天皇の和銅元年」を意味する。

B　『名義抄』『字類抄』「大系」「全集」は、それぞれ、『類聚名義抄』『色葉字類抄』「日本古典文学大系（今昔物語集）」「日本古典文学全集（今昔物語集）」を意味する。

C たとえば「二三―四」は、『今昔物語集』巻第二十三巻の第四話を意味する。

一、頭注欄の適当な個所に＊印の欄を設けた。巻末の付録「説話的世界のひろがり」に、頭注欄に述べきれない、説話的な世界の事柄を解説したが、＊印は、それへのインデキスである。随時参照ねがいたい。

一、頭注欄には、各話の主要な段落に小見出し（色刷り）を入れ、話の展開をわかりやすくした。

〔付　録〕

一、付録として「説話的世界のひろがり」および地図四葉（「京都左京㈠」、「京都東南部」、「京都右京㈡と北山」、「琵琶湖南地方」）を付した。

一、「説話的世界のひろがり」は、頭注からはみ出す、主として説話的世界の事柄を記すことにした（頭注欄に＊印および〔　〕をもって記した見出しが、それぞれに対応している）。これは、言わば注釈のなかであけた幾つかの窓である。その窓から我々は若干の風景を見る。鬼たちの民俗をやや多く見ることになったのは、もとよりこの巻に収めるものの自然にすぎない。

本文の作成には内田賢徳氏の協力を得た。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com